



藤樹書院

近江聖人中江藤樹

慶長13（1608）年3月7日、高島郡安曇川町上小川（その当時は小川村）で中江藤樹は生まれた。美しい湖水とのどかな田園風景のひろがる所に、藤樹書院、墓所、神社がそれぞれ静かに建っている。湖西線安曇川駅の東方約2kmのところである。

中江藤樹、名を原といい、普通は与右衛門と呼ばれ、両親は農業を営んでいましたが、祖父徳左衛門吉長は米子城主加藤氏に仕える武士でした。

元和2（1616）年、与右衛門は祖父につれられ米子にうつり、初めて字を習いました。翌年の夏、藩主の国替により祖父とともに大

洲へうつり、ここで師について『庭訓往来』や『式目』を学び、11才の時『大学』をよんで「天子ヨリ庶人ニ至ルマデ、尙是ニ皆身ヲ修ムルヲ以テ本トナス」というところに感激し、この本の通りに生きたいと固く決心されたと言われています。

書院の焼失

建造物・絵画あるいは典籍等の文化財を、500年や1000年はおろか未来永劫にわたって損耗・散佚することなく、現状のままで保存することは、なかなか困難といわざるを得ません。わが国に文化財保護法というすぐれた法律があるからといって、また各市町村に文化財保護条例や著名な専門委員が置かれて



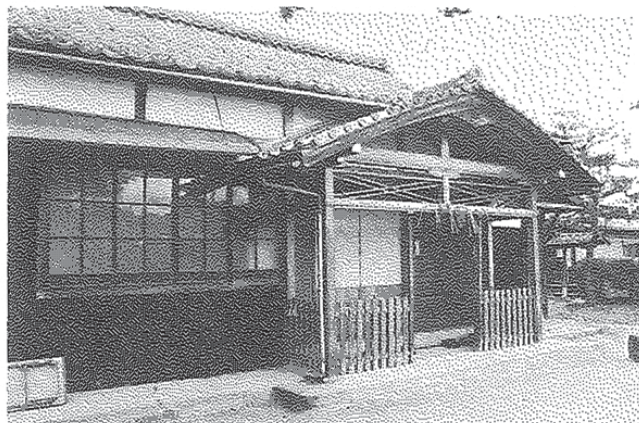
藤樹書院

いるからといって、それによって保存維持が可能と考えるのは浅薄でありましょう。

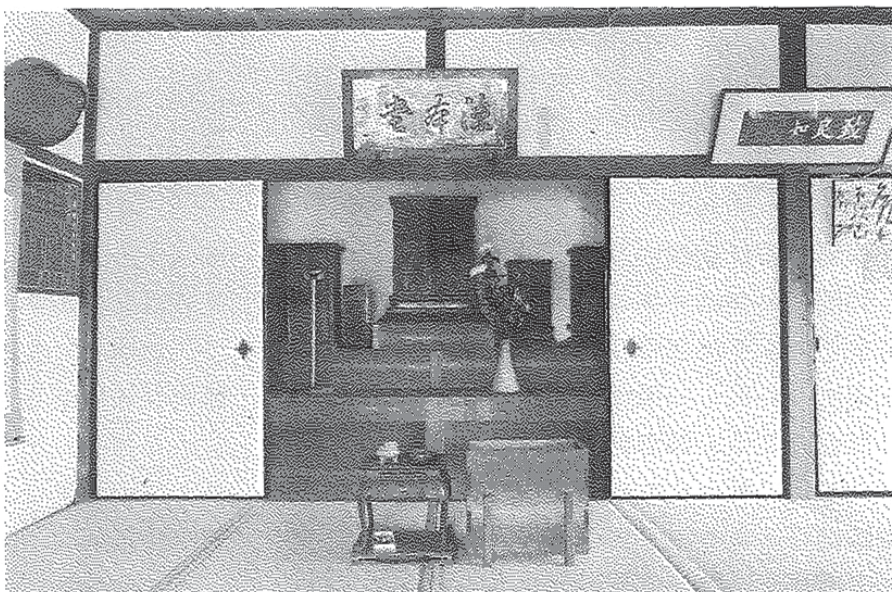
例えば、地震・台風・水害等の天災、また火事等の人災——これらはいつ起こるか予測ができませんし、たとえ火災警報機などの周到な措置をし、いち早く発見し全焼はまぬがれたとしても、ある程度の被害を受けることは確かです。文化財が損壊する原因を考えて

みますと、今いったある意味では不可抗力な外的要因と、もう1つは文化財そのものの性質からくる、いわば寿命ともいべき内的要因とにわかれます。

前者の例としては、昭和24年の法隆寺金堂壁画の焼失がことに有名であります。ここに取り上げる藤樹書院もまたその典型といえます。藤樹書院が慶安元（1648）年2月、諸門弟の発起により創建整備されてから、この昭和53年で370年をかぞえますが、しかしながら現在私達がみる講堂と土蔵の2棟の建物は、じつは創建当初のものではなく、明治13（1880）年9月26日の小川村に起った34戸におよぶ大火によって類焼し、翌14年に滋賀県令の籠手田安定ほか3名が発起となり有志をつのって、翌15年に再建されたのです。



講堂の玄関



書院内部（祭壇、中央の神主）

現在の講堂の規模ならびに間取りは、創建時のそれと大分異なりますが、幸いにして宝暦9（1759）年に大溝藩士の分部清興が描いた書院の外観図（スケッチ）と講堂の精密な間取り図、さらには天明5（1785）年10月8日書院に訪れた橋南谿の『東遊記』（1797年刊）を通じて類焼以前における書院の構造は充分知ることができます。明治13年の類焼で書院の建造物はすべて灰燼に帰してしまいましたが、神主（儒式の位牌）や書籍などの多くの遺品は、付近の人達によってことごとく移され、焼失するまでには至りませんでした。

370年の歴史をもつ藤樹書院が、ともかく紆余曲折をへて現在の状態にまで保存できたのは、藤樹没後、多くの地元の同志あるいは三輪執斎・中井榮庵・佐藤一斎・大塩中斎（平八郎）といった近世史上に名をとどめる人びとの浄財をもって整備・維持につとめてきたわけで、決して安穏とした370年ではありませんでした。これも中江藤樹の遺徳を慕ってのなせるわざと言えればそれまでですが、たしかに1月11日の儒式にのっとり「講書始めの儀」や9月25日の「藤樹忌」等、現在もなお書院において毎年諸行事が行われ、全国から訪れてくる人も年に数千人をかぞえます。

話は少しそれましたが、藤樹没後の書院の

管理維持は一体どのような人びとにより、またどのような形で行われたかという課題を中心に、言及していこうと思います。

藤樹墓所の^{いがき}斎垣

書院を語る前に、藤樹墓所の周囲にかこっている石の斎垣のことについて触れておきましょう。中江藤樹は慶安元（1648）年8月25日、41才という若さでなくなり、遺骸は門弟たちによって書院から北へおよそ100



藤樹墓所と斎垣（左より藤樹・その母・常省の墓）

mほど離れた、同じ小川村の玉林寺に手厚く埋葬されました。

現在、玉林寺の門前の一画に、南に入口を設けた東西8.5m、南北8.5mの斎垣の中には、向って左側に「藤樹先生墓」の石碑が、またその右側には藤樹の母北川氏の石碑が、そしてその手前には藤樹の三男弥三郎の「^{いけい}常省先生墓」の石碑があります。この3氏の^{とまんい}土饅頭の形をした墳墓のまわりにみられる石の斎垣は、今では相当に風化してきましたが、享保6（1721）年に京都同志をはじめ、217名の全国の同志の熱意によってつくられたのです。それは藤樹がなくなってから、73年も過ぎた出来事でありました。その経緯を要約しますと、次のとおりです（『藤樹先生全集』第5巻、1940）。

享保5年に小川村に住む大森周介が上京した折に、藤樹先生の御墓所の斎垣が破損している由を京都同志の河合徳右衛門に話した。これを聞いた京都同志は深く心配し、さっそく河合らは大森に墓所の周囲を石でしたらどうか、ということを書いて小川村に戻らせた。そこで、大森はこのことを高島同志の安原善蔵・同茂助・同浅右衛門・同^{いけい}貞平らに相談すると、「^{いけい}重畳の御事」と言った。その後、高島同志は南小松村の石屋八郎兵を呼び石垣の

相談をして、その委細を記した書状を河合のもとへと持参した。河合ら京都同志が総代になり、国々の諸生に建設費をつるための書状を送り、いよいよ翌享保6年7月、石屋に申し付け、8月26日までに出来上がったのである。

なお、217名の内訳を地名別で見ますと、京都31名、江戸48名、姫路14名、会津78名、高田村中14名、阿波12名、伊勢・津15名、桑名5名となっています。このように石の斎垣1つを取り上げても、長い歴史が息づいており、さらに前記の宝暦9年に分部清興が描いた墓所の外観図をみても、その状態は今日と何ら変改されていないことがわかります。

講堂の復原

昨年の12月、財団法人藤樹書院は高島ライオンズクラブより寄付金をうけ、その一部で土蔵の屋根瓦の葺替え工事をしました。この土蔵は、講堂の西隣、門塀に接した所にあり、明治13（1880）年の書院の焼失の際に、講堂とともに藤樹の遺品類を納める文庫として新たに建てられたものでしたが、最近では柱や壁など相当に腐朽しています。

したがって、明治13年の焼失以前の書院の建物としては、『藤樹先生全集』第5巻による限り少なくとも講堂1棟のみであったとい

えます。そこで、門弟たちによって創建された講堂の様子について復原しますと、まず享保6（1721）年8月11日、京都古義堂の伊藤東涯が書院を参詣した時につくった漢詩に

江西書院名を聞く久し。
五十年前義方を訓ふ。
今日始めて来る絃誦の地。
古藤影は掩ふ旧茅堂。

とあり、これが藤樹没後の講堂（茅堂）を伝えるもっとも古い記録です。

同年9月4日、前節で述べたところの藤樹墓所の石の斎垣が完成して、それを慶祝するために京都同志、岡田以安・山田由元・木野自安・河合徳右衛門が来村し、墓所ならびに藤樹の神主に対し酒肴を献じます。そしてこの時に、岡田以安がつくった漢詩の一節に「鬢舎今存し道尚明かなり」とあって、慶安元年の講堂が享保の今も尚、現存していたことが知られます。

享保6年から40年ほどたった宝暦9年の分部清興の描いた外観図では、講堂の屋根は茅葺きの入母屋造をし、南面に縁側とその縁側の中央に玄関を、そして西面にも勝手口を設けています。また間取り図をみると、全部で7間の部屋がそれぞれ壁と襖障子によって分



土蔵

けられ、59畳をかぞえます。藤樹が門弟を前に講学をしたのは、神主・聖像・祭器等の安置する15畳敷の部屋であったこととされます。

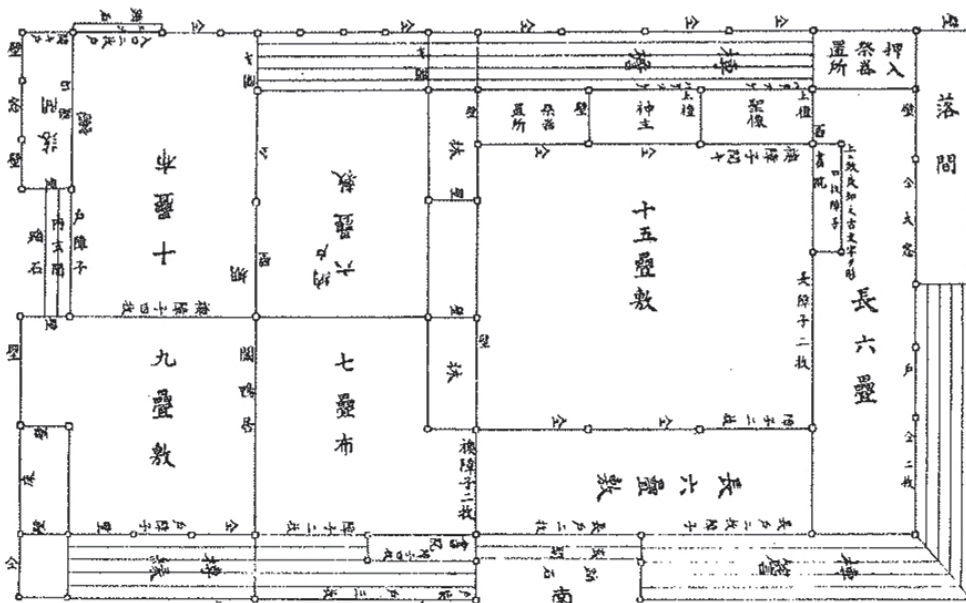
次に、橘南谿の『東遊記』（『藤樹先生全集』第5巻所収）の一部を抜粋すると、「さて講堂を開きたるに、堂はかやぶきにて15畳縁がはあり」と書き記すが、間数4間ありというのは橘の勘違いか誤字かのどちらかです。それはともかくとして、講堂の内部には天井がなく直接屋根裏のかやぶきが見えていたことがこれによってわかります。

以上が江戸時代における講堂の様子を伝える記録のすべてですが、とにかく分部清興の間取り図（平面図）がもっとも詳細かつ精密

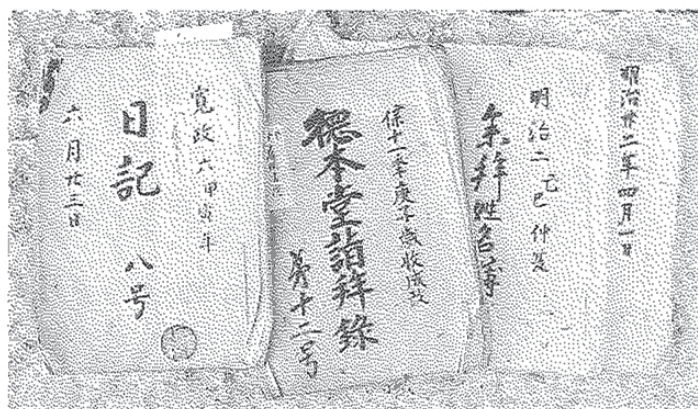
に書かれ現存しているので、現在の私達にとって不幸中の幸いというべきかも知れません。

書院の修復

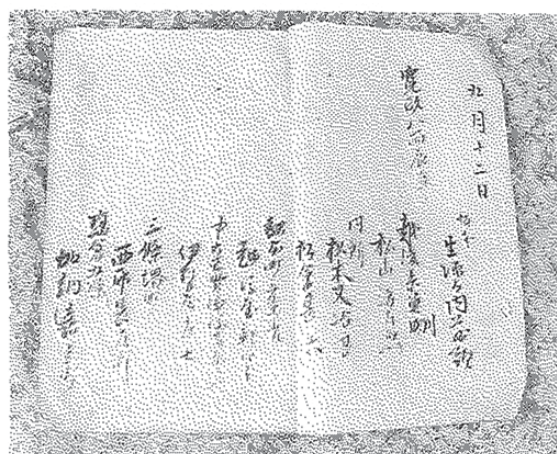
書院の講堂は、特別立派な建物とはいいがたいごく普通のもので、このような建物の特に屋根などは、当然のこととして20～30年に1度は必ず葺き替えをしなければならないですし、さらには屋外の柱・壁も同様であっ



講堂間取図



書院参拝録



たでしょう。

そうした講堂の修復に関する記録のうち、享保年間までの60数年は今日あまり詳しく知られていませんが、享保以後においては「書院日記」「徳本堂詣拝録」等により散見できます。その主なものを次に列挙してみました。

享保5（1720）年3月、講堂の屋根の南方を葺き替え、北西東の三方は指萱にて修復する。この作業には小川村より毎日人足を5人ずつ、近郷の南市村みないちおよび五番領村ごばんりやうの同志の中より人足2人ずつ出す。志村仲昌・小川助左衛門・中江仁兵衛は毎日手伝い、中旬に落成する。

享保18（1733）年正月、江戸の三輪執斎・二見直養ほか49名は、書院の修復料および藤樹墓所のすぐ北に設けている橋の修復料として小判5両を寄付する。

享保19（1734）年5月21日、会津同志の五十嵐養庵ら65名は書院の修復料として、金5両1歩、銀5匁を寄付する。

延享4（1747）年8月25日、諸生同志が会合して藤樹100年忌をいとなむ。この時、松下氏秘蔵の先生真蹟本草々稿100葉を寄付し、諸国より参詣の同志に頒つ。同志は、そこで書院の修復料として方金100疋を奉納する。

延享5（1748）年5月、講堂の屋根の北方を葺き替える。

寛政8（1796）年9月8日より書院の表通りの石垣を築く。高さ2尺、長さ15間。

寛政12（1800）年9月、門弟の子孫、志村

周助・小川丈大夫・安原権兵衛・小島太郎作ら江戸に出て、書院修復のための浄財をつくる。

文化10（1813）年、書院の講堂、土蔵(?)落成する。

文政4（1821）年4月、書院維持のため小川村の志村周兒・小川四郎次郎その他あい図って講堂講を發起する。

天保4（1833）年11月、大塩中齋およびその門人は、書院の永久修復料として金15両を寄付する。

天保14（1843）年正月、大溝藩主の分部光寧は、書院の保存費および祭祀料として銀1貫匁を下付し、また今年より8月25日の忌辰きしんには、村内年々休日する旨を命ずる。

書院をささえた人々

以上、享保より天保にいたるおよそ130年間にわたって、東は江戸・会津から西は大坂・備前まで、藤樹の遺徳、学問を慕う同志の浄財によって、書院を維持してきたことがわかります。そのことは、江戸幕府がその封建体制の秩序を維持するために、儒学ことに林家の昌平しやうへい齋を中心とする朱子学を正学として利用したことから、儒学者は武士や農民等とくらべると、三都さんとにあってはあまり拘束されずに比較的自由な中で学問に専念でき、また諸藩においても重用されたので、わざわざ遠隔地にある藤樹書院を訪れては修復料を寄付するという行為が、公然とできたのでありましょう。

ただし、藤樹は20代前半の頃より、曲学阿世の林羅山に対し厳しく批判的で、37才の時に『陽明全書』を手に入れ読むや否や形式主義の朱子学を棄てて、陽明学へと移っていったのです。そのため幕府からすれば、藤樹は危険思想をもった反体制学者として次第に見られるようになります。

そうしますと、藤樹没後より享保期まで書院への参拝ならびに修復料の寄付といった行為が今日詳しく伝わっていないのは、何も記録が散佚してしまっただけではなく、むしろ幕府の厳しい眼が藤樹の門弟あるいは陽明学を信奉する儒学者に向けられていて、弾圧を恐れていたためと思われます。享保といえば、享保の改革という歴史的事象がすぐに頭に浮かぶように、江戸開幕以来の1つの大きな過渡期にあたり、そういう中で藤樹の学問が熊沢藩山や淵岡山らによって次第に他の儒学者たちの中に浸透し、評価されてきた時期ではなかったでしょうか。

享保期からおおよそ20年をへた宝暦3(1753)年に著述された『藤夫子行状聞伝』の序文には、その頃の藤樹の儒学の盛況ぶりの一斑がうかがえます。この著者の志村仲昌は、小川村の人で「常耕」と号するように、書院の管



中江藤樹画像

致良知

藤樹書院蔵 真筆「致良知」の軸より

理をするかたわら農業を生業としていたと思われ、身分制のはっきりした時代にあって、このように一農民が儒学を学び、74才の時に著わしたのです。

藤樹没後における書院の直接的な管理運営は、小川村の志村・小川・笠原および書院の隣りに住む淵田の4氏が中心となり、近郷の安原・中村の両氏をまじえて協力しあったのです。と同時に、春秋にわたる儒式の祭祀もまた、彼らによって絶やすことなく営まれたのです。

ことに安原節伯とその子文煥は、藤樹の三男・弥三郎に深く師事し、弥三郎が晩年京都にあって長年の病気のため家計が苦しい時に、宝永6(1709)年5月小川村に戻らせて、身の回りの並々ならぬ世話をしたのですが、そのかいもなく弥三郎は書院でなくなります。

安原氏は、世々権兵衛と称して、ほぼ現在の行政区画にあたる大字田中を領地とする膳所藩の代官で、南市村に屋敷をかまえていました。そのような立場にありながら、大溝藩に属する書院の維持修復等に代々渾身をかたむけたのは、どうも藤樹の学問というよりも人間性が藩という枠を越えて、何か多くの共鳴するものがあったからでしょう。もっとも、節伯・文煥父子とともに分家の仲武・貞平父子も、幼少より聡明で学問を好んだことも、見のがしてはなりません。

こういった小川村の同志、さらには安原・中村といった近郷の同志ら、すなわち歴史の表舞台には全く登場することのない人々によって、今日まで藤樹書院は守られてきたのであります。(中江 彰氏提供)